

(3. 共同研究班活動報告)

3-2. 「『小集団』を対象とした社会学・民俗学理論」研究班 活動報告

三隅 貴史・谷岡 優子

1 研究会の主旨

「『小集団』を対象とした社会学・民俗学理論」研究班設立の目的は、「現代における『民俗学』とは何か」について周辺分野との対話を交えながら理論的な検討を進めることにある。近年、民俗学においては「現代民俗学」といった言葉が利用されることもある。しかし、それがどのようなものを指すのか、あるいはこれまでに利用されてきた「都市民俗学」といった言葉などどのように異なるのか、といったことに関して明確な共通理解が示されているとはいえない。

本研究会では、研究班の成員の興味に沿った形で「現代民俗学」を以下の2点の意味合いを持つ言葉として緩やかに定義を行った。

仮定義①：現代社会において、これまで「民俗」と称されているものに、どのような変化や主体的な変更が生じているのか、そして「民俗」が現代社会の中でどのような意味を持っているのかについて研究する学問（＝現代に視野を広げた「民俗」の研究）

仮定義②：北米の民俗学の知見を踏まえ、「民俗（以下、一般的な『民俗』という言葉の意味と使い分けを行うため、『フォークロア』と記載する）」を「社会／自然環境のもとで、個人・小集団が（時には、個人・小集団『のみ』が）より良く生きるために発揮する創造性」として定義する。そのうえで、現代社会における「フォークロア」を研究する学問（＝歴史性・民族性を明らかにするといった目的ではなく、「現代における人間の生」を描き出すという目的で行われる「フォークロア」の研究）

このように「現代民俗学」を仮定義した上で、仮定義①・仮定義②の双方に関する理解を深めることを目的として、これまで勉強会を実施してきた。これらの定義に関係する問題はそれぞれ、社会学や人類学などの周辺分野との対話が十分に可能な学際的問題である。勉強会の際には特に、民俗学という分野だけにとどまらず、他分野との接点を意識することを心がけた。

2 実施した勉強会の内容

(1) 仮定義①に関する勉強会

まず仮定義①に基づいて本研究班では、現代社会と民俗との関わりについての勉強会を開催した。これは昨年度、本研究班の前身である「人口減少時代の地方祭礼・伝統芸能」班において設定していた現代的な問題意識を引き継いでのことである（詳細は『KG 社会学批評』第5号 71-74 頁を参照。）

昨年の「人口減少時代の地方祭礼・伝統芸能」班は、2016年2月27日に第2回研究会を実施し、次の2点を課題として設定した。

【課題】

1. 祭礼・民俗芸能を維持している人びとが、時代の変化に対して、どのように対応することで、祭礼・民俗芸能を維持している（あるいは維持を中断している）のだろうか？
2. 人口減少時代の日本において、どのように民俗学者は調査地の人びとと関わっていくべきなのだろうか？

この我々が設定した課題に対し、昨年の招聘者である俵木悟氏（成城大学文学部）は、鹿児島県いちき串木野市大里の「大里七夕踊」、岩手県宮古市津軽石法の脇の「法の脇鹿子踊り」、そして『ごいし民俗誌－岩手県大船渡市末崎町碁石五地区』（国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部編 2014）を事例として報告を行ない、この課題への回答を示した¹⁾。

まず「大里七夕踊」の事例に関する俵木氏の報告を紹介する。「大里七夕踊」は、鹿児島県いちき串木野市大里において、旧暦7月7日に各集落の青年団（二才）によって演じられる民俗芸能であり、「テコオドイ（太鼓踊り）」と「カッワマイ（垣回）」で構成されている。1981年に「市来の七夕踊」として国指定重要無形民俗文化財に指定された。

俵木氏は本事例において、今日さげられる「若者離れ」は、大里地区においてはすでに昭和10年～昭和40年頃にかけて問題視されていたこと、そしてこの問題は単に青年の嗜好や時代論・世代論に還元できないこと、さらに2008年、社会情勢から踊りの実施が困難になったこともあり、担い手主体の改革が進められていることを報告した。

また、本事例において俵木氏は、地域の人びとからの俵木氏への認識が、年を重ねるにつれて、「役場の人（芸能の調査に来る人）」、「去年も来た人」、「毎年来る人」、「毎晩来る人」、「芸能で共に踊る人」と変化してきたことから、民俗学者の民俗芸能への関わり方には流動性があることを指摘した。

次に『ごいし民俗誌』に関する俵木氏の報告を紹介する。岩手県大船渡市末崎町碁石五地区

1) ただし、当日の研究会では時間の都合のため、二点目の「法の脇鹿の子踊り」の報告を省略した。

は、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって被災し、住民の移転が行われた地域である。そんな碓石地区で2012年6月に、震災前の暮らし、「当たり前」だった日常生活の記録を目的にしたプロジェクト『ごいし民俗誌』の作成が始動した。記録内容は「一年のなりわい」「暮らしの祈り」「衣食住」「村の風景」の4点で、手法は聞き書き、古写真の収集によって行われた。

俵木氏は『ごいし民俗誌』の作成に民俗学者としてどのように関わったかについて報告を行った。ここで俵木氏が指摘したのは、作成のための調査を行うことによって、「研究者だからできること」と「地域の人びとが求めること」の接点が徐々に浮かび上がってきたということである。

これらの報告を踏まえて俵木氏は、どのように「民俗学者は調査地の人びとと関わっていくべきか？」という問いに対し、「正解があるわけではない。関わり方そのものが、関わり続けることで変わっていく」と、あるいは「研究／実践（介入）という二項対立で考えるべきではない。研究者としてのスキルや知識と、人びとが求めるものとのマッチングや、バランスの取り方を常に意識しながら、『関わり続けること』が重要である」と総括した。

こういった昨年の俵木氏の指摘を受けて今年度の研究班では、東日本大震災と民俗学・社会学についての勉強会を実施した。その中で特に班員の印象に残ったのが、文化財レスキューや近代文明批判といった視点を超えて、「暮らし」の文脈から、震災後起こったことを考えようとする政岡伸洋の論考（例えば（政岡 2012）など）である。これらの論考は、「現代」における民俗の持つ意味に関して深く考えさせられるものであった。

(2) 仮定義②に関する勉強会

次に仮定義②に基づいて本研究班では、「現代社会におけるより良く生きるための創造性」の事例として、インターネット上における小集団の有するフォークロアを事例とした勉強会を実施した。

近年、日本でも伊藤龍平（伊藤 2016）などを筆頭として、インターネット上の民俗を研究しようとする試みが登場している。これらの研究は、①欧米における「フォークロア」の定義が「農民の慣習」を指すものから変化していることを必ずしも強く意識しているとはいえない点、②「口承文芸」・「現代伝説」の研究の延長線上に位置づけられているため、小集団のインターネット上での表現文化については研究対象としていない点などにおいて、より今後の発展性が期待できるものである。

これらの点を踏まえて本研究班では、McNeill（2013）といった学部生向けの教科書から、Blank ed.（2009）といったインターネット上におけるフォークロアに関する専門書まで、様々な書籍を取り上げて勉強会を行った。勉強会の目的として、①インターネット上の小集団のエスノグラフィー執筆手法及び、分析手法を身に付けること、②“Folk”、“Lore”、“Lived/Living / Vernacular”といった概念を取り入れ、参加者が各自の研究に生かせるようになること、の2点を設定したが、これらの点において学びの多い勉強会になったと感じている。

3 今後の予定

このような勉強会を踏まえて、本研究会では今後、仮定義①・仮定義②のテーマに合致した教員の招聘を行いたいと考えている。まず仮定義①に対しては、昨年度、民俗文化財を通じての民俗学者と調査地の人びととの関わりについて焦点を当てた研究会を開催したことを生かし、今年度は行政の立場から民俗文化財に関わる民俗学者と地域の人びととの関わりについて焦点を当てた研究会を開催したい。

そこで、2017年3月中に、京都市文化財課に所属する村上忠喜氏をお招きして、「ユネスコ無形文化遺産と民俗」をテーマに研究会を実施する。2016年12月に「山・鉾・屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことに象徴されているとおり、今日民俗は「無形民俗文化財」としての価値を見出されつつある。そのような現代的環境の中で、民俗にはどのような変化や主体的な変更が生じているのか、そして民俗が現代社会の中でどのような意味を持っているのかといったことについて、村上氏にお話しいただく予定である。

また、仮定義②のテーマに合致した教員の招聘として今後、班員が興味を持っている「現代社会における生きられた創造性」に関する研究についてお話しいただく予定である。詳細は現在交渉中ではあるが、社会学や人類学などの周辺学問と親しい関係にあるテーマであることを踏まえ、周辺の学問分野の人びとと活発な議論を行うことが可能なテーマを設定したい。

【参考文献】

- Blank, Trevor ed., 2009, *Folklore and the Internet: Vernacular Expression in a Digital World*. Logan: Utah State University Press.
- 国立文化財機構東京文化財研究所無形遺産部編, 2014, 『ごいし民俗誌－岩手県大船渡市末崎町基石五地区』国立文化財機構東京文化財研究所無形遺産部.
- 伊藤龍平, 2016, 『ネットローア－ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』青弓社.
- 政岡伸洋, 2012, 「暮らしの文化と復興に向けての課題」, 『21世紀ひょうご』第12号, pp.3-18.
- McNeill, Lynne S, 2013, *Folklore Rules: A Fun, Quick, and Useful Introduction to the Field of Academic Folklore Studies*. Colorado: Utah State University Press.